

第5回東亜総研月例セミナー講演録

日 時：平成26年5月12日（月）13時30分から15時まで

場 所：東京都千代田区麹町4-1-1 麹町ダイヤモンドビル9階 株式会社レコフ会議室

講 師：モンゴル国 特命全権大使 ソドブジャムツ・フレルバートル閣下

テーマ：日本とモンゴル—モンゴルから期待する日本

<講演録>

司会：まず開会にあたりまして、当財団の代表理事会長の武部勤からごあいさつ申し上げます。

武部：皆さん、こんにちは。東亜総研の代表理事を務めております、武部勤でございます。先ほど案内のありましたとおり、昨年6月27日に設立登記をした東亜総研でございますが、各界の注目度も高く、この月例セミナーも大使シリーズということで、5回目となるわけでございます。一番最初はバーレーン大使でございました。次に、ベトナム国のフン大使、そして谷崎前駐ベトナム日本国大使、さらにはユスロンインドネシア大使、そして来月は駐米大使を務めておりました藤崎さんに講演をお願いしております。最近の世界情勢、特に東アジアにおきましても、さまざまな問題が露呈しております。わたしども議員在籍中に書きましたのは、もともと民間外交あるいは議員外交というものを積極的に展開する必要があった、政府間の話し合いですと公式の話しかできないんです。この2月と4月にベトナムに行って参りましたけれども、3月に国賓としておいでいただきましたチュオン・タン・サン国家主席は、二階先生会長の日越友好議員連盟の大変な労力で国会演説もやっただきました。素晴らしいスピーチでありまして、日本の報道はどうしてそういうことをちゃんと報道しないのかわかりませんが、ベトナムはじめ、アジアの国々で大きく報道されたんですね。今になって、中国とベトナムの南沙諸島における船の衝突事故でいろいろと報道が過熱気味でありますけれども、我々はアジアの一員であります。日本の外交政策の基軸は、日米同盟とアジアの一員としての外交、これが日本の生きるべき道だと思います。そういうことを考えますと、本当に我々アジアの国々を自分のことと受け止められるような努力をしていかなければならないと感じまして、私の引退後、アジアと日本の懸橋、アジアとのプラットフォームづくりと考えまして、東亜総研を設立した次第でございます。

本日お出でいただきました駐日モンゴル国フレルバータル大使閣下は、私が海部総理に同行し、はじめてモンゴルを訪問した 1991 年以來、訪問するたびにずいぶん大きく発展しました。しかし、常にロシアと中国の狭間で、おそろくなかなか言葉に言い表せない苦勞をしている国家だと思ひます。本日、大使閣下から何うお話を率直に受け止めて、東アジア地域における我々の生きる道について、皆さんとともに考えることができればと思ふ次第でございます。本日は、日本モンゴル友好議連会長の林幹雄先生にお越しいただいております。私は現役時代、日本モンゴル友好議連の会長をしていたのでありますが、引退いたしましたして、最も信頼する林先生に、議連の会長をお願いした次第です。ベトナムは二階先生、インドネシアも二階先生、タイは塩崎先生をお願いしました。その他、メコン議連会長、バーレーン議連の会長までやりました。東アジアの国々は、日本にとって極めて重要な国々でありますし、また東アジアがアジアの發展、世界の平和と繁榮の大きな原動力になっていくのだろうと考えております。議員連盟の会長さんたちと相手国の首脳との会談の様子は、そばにいる大使の心臓が止まりそうなるくらい率直で激しい議論があり、なかなか公式には言えない内々の話も議員連盟は率直に話し合っておりまして、そういったことが政府をバックアップしていると思ひます。せつかくでございますので、議連の会長林先生から一言挨拶をいただければと思ひます。また、フレルバータル大使閣下にも本日の講演を皆期待しておりますので、宜しくお願い致します。以上をもちまして、主催者としてのご挨拶に代えさせていただきます。どうぞ宜しくお願い致します。

司会：本日は、日本モンゴル友好議員連盟会長の林幹雄先生にお越しいただいておりますので、一言ご挨拶をお願いしてよろしいでしょうか。宜しくお願い致します。

林先生：皆さん、こんにちは。東亜総研セミナーにお招きいただきました、林でございます。武部先生が引退と同時に、モンゴルはお前やれ、という命令のもとで、会長を引き受けた次第ですが、まずは百聞は一見に如かずでありまして、昨年の夏、53 人くらいでモンゴルに行ってまいりまして、大統領閣下をはじめ、総理、あるいは 5 人の閣僚と会わせていただきましたが、全てフレルバータル大使の手配でやっていただきました。帰国して、今度はモンゴルの総理が来日するというところで、自民党本部で大演説会を開いて歓迎しようということ、自民党本部を満員にしまして、長蛇の列ができたのは初めてではないかと思われるくらいの大盛況でした。しかも、外国の総理大臣を党本部の 8 階大ホールで演説してもらったのは初めてのことでした。その際も、大使には大変なお骨折りをいただいた次第であります。そういう中、8 月 20 日前後を計画しているんですけども、日本モンゴ

ル書道展をウランバートルでやろうではないかということで、今大使と協議をしているところでありまして、前会長の武部先生からはもう賞をいただいております、日本から 50 点くらいお持ちして、ウランバートルでも 50 点くらい出していただいて、文化交流の一環として盛大にやりたいと思っております。一言でいえば、モンゴルは極めて親日的なところでございます。気候は寒いんですけども、暖かいところでもあります。ここから、同胞といった感じがするところがございます。成田からだいたい直行便で 5 時間強で着くそう遠くない場所であり、これからも議員交流をして国家間のバックアップをしていければと思っておりますので、皆さんからご指導・ご鞭撻をいただければと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

司会：林先生、ご挨拶ありがとうございました。それでは、フレルバートル大使閣下から、「日本とモンゴル—モンゴルから期待する日本」と題してお話いただきます。よろしく願いします。

大使：皆さんの前で、モンゴルと日本の関係の話をするすばらしい機会をいただきましたことに、大変光栄に思っております。こういうセミナーに招待してくださった東亜総研の武部会長、そして林先生、本日ここに参加している皆さんに対し、心から敬意の意を表したいと思います。さて、モンゴルと日本との関係ですけれども、1972 年 2 月 24 日、両国間に外交関係が樹立されました。それ以来、本日まで、42 年が経っております。その 42 年間の前半は、モンゴルは日本と支配体制が異なっていたものですから、両国の関係が積極的に発展する可能性は限られていました。しかし、後半の 25 年間、モンゴルが民主主義の国に生まれ変わって、日本国民の皆さんはモンゴルの民主化を支援したおかげで、両国の関係は急速に発展しました。東亜総研会長の武部先生に、私とモンゴル国はすでに 25 年間お世話になってきました。武部先生は、日本モンゴル友好議員連盟の会長として、長年、モンゴルと日本の関係の発展強化に力を入れてきましたし、政治家としてもモンゴルとの交流をもっとも深く続けている先生であります。前もって発表しますが、モンゴル政府内では内定しており、来週には決定できますけれども、武部先生は在北海道モンゴル名誉領事に就任されます。そして、来月の 6 日から、札幌でそのセレモニーが行われることを喜びをもって皆さんの前で発表させていただきます。両国の関係に話を戻しますと、1990 年のモンゴル民主化まで、両国の関係は積極的に発展する可能性が限られていました。しかし、当時の東西関係、非常に緊張した関係、冷戦下において、他の社会主義国と比べて、平凡でゆっくりだけでも一步一步安定した関係の基盤ができていたと今から見ると思われ

ます。本格的に両国の関係が発展するチャンスができたのは、1990年です。1990年にモンゴルが共産主義のイデオロギーを拒否して、民主主義の道を選んで、民主主義国家としてがんばる道を歩き始めました。日本政府や日本国民の皆さんはモンゴルの民主化を一所懸命に応援・支援することになっていきますので、両国の利益が合致して、何よりモンゴルと日本は民主主義、人権、平和といった共通の価値観を共有することになったことが、両国の関係が発展するよいチャンスを与えてくれました。先ほど、武部先生から話がありましたけども、モンゴルが民主主義を始めた1991年8月14日の日に、日本の総理大臣として、海部首相が初めてモンゴルを訪問しました。そのときのことを、昨日のこのように思い出しています。そのときに、海部首相が宣言したのは、日本政府は、モンゴルの民主主義を政治・経済的に応援します。二国間ベースだけではなく、国際母体でもモンゴルの民主化に応援・支援するメカニズムを作っていきます、ということでした。その瞬間から、両国の関係が急速に発展する素晴らしい将来が引かれたわけです。日本政府はその約束を守りました。翌年の5月のサミットの際、政治・経済の宣言にモンゴルを支援する文章を入れてくれました。おかげで、その年の6月からは、世銀と日本政府が共催でモンゴルを支援する会議を10年間、毎年東京で開催しました。そのおかげで、モンゴルに対する政治的支援、何よりモンゴルが非常に困っていた経済を支援する会議を10回やってモンゴルを助けてくれたわけです。そのときからもう25年間経っていますが、日本のモンゴルに対する支援は、世界のどの国よりもいち早く、応援するものでした。それが、日本とモンゴルがもっと近い国になることに大きく貢献したことを、誇りをもって強調したいと思います。そのモンゴルの特徴を、一言で皆さんに申し上げたいと思います。いくつかの特徴があります。まずモンゴルは、「古くて若い国」です。「古い」というのは、今から2220年前に中央アジア高原の初の国家としてフンヌという国を作ったのが、モンゴルの土台となっています。また、13世紀のユーラシアのモンゴル大帝国、チンギスハンとその孫たちが作ったのが、モンゴルの「古い国」であります。新しい国というのは、モンゴルが民主主義の道を選んで歩み始めてからわずか24年間としましょう。ですから、モンゴルは「若い国」なのです。そのモンゴルの次の特徴は、「若くて若者の国」です。モンゴルの人口は少なく、日本の人口の60倍少なく、わずか300万人足らずです。しかし、その国の人口の7割が35歳以下の青少年です。次の特徴は、旧ソ連に引き続いて、世界で第二位の社会主義国として70年間活躍したということです。しかし、なぜモンゴルが第二の社会主義国となっていたかという、共産主義のイデオロギーがよくわかって、それを歓迎して自分の意志で

やったわけではありません。好きで選んだ道ではないのです。それは、自分の国の独立を維持保全するためのやむを得ずの選択であったということを知っていただきたいのです。歴史を少し繰り返してみると、13世紀にチンギスハンは息子や孫をユーラシアの大帝国を作った素晴らしい時期でありました。しかし、チンギスハンが亡くなった後、権力のための息子たちの闘争、引き続いてその孫たちの闘争、そういうことでモンゴルは14世紀から15世紀には大変な国内の混乱があり、結局たくさんの小さな王国に分かれてしまった。そのとき、隣の遊牧系の満州国が力をつけてきて、モンゴルを100年かけて1つ1つの王国を征服して、17世紀の終わり頃、モンゴルは世界の地図から消えてしまう悲しいことがありました。それから230年経って、1911年、モンゴルは中国とともに、革命を起こして、中国から独立しました。それから、独立して歩んでいくという素晴らしいチャンスを手に入れたと思ったが、モンゴルを独立した国として承認してくれる国が世界に一つもありませんでした。当時のモンゴルの王様が、日本の天皇陛下、ドイツ、イギリス、アメリカ、フランス、タイにモンゴルの独立を承認してくれるよう親書を送ったが、結局反応がありませんでした。中国はその頃、モンゴルと中国は清国のもとで一緒の国だったため、モンゴルは中国の一部で、中国に加盟すべきだと主張しました。モンゴルは、我々は独立します、我々は中国のもとではなく、独立して自分の道を歩みますと言ったら、中国は軍隊を送り、1919年、モンゴルを征服しました。その頃、北の隣国ロシアでは、10月革命が起こり赤軍に負けて白軍がモンゴルに逃げてきました。1920年、モンゴルは、中国、ロシア2つの国の圧迫のもとに倒れてしまいました。それを利用してモンゴルの愛国者たちが旧ソ連に対して、赤軍に来てもらって外国の軍隊を追い出してほしいという親書をまとめたところ、1921年3月から7月にかけて、赤軍が来て追い出してくれました。それはモンゴルの歴史の中では、独立のための人民革命と名付けています。そこで本当の独立のためのチャンスを手に入れたと思ったら、その次にもっと大変なことがありました。ロシアは共産主義のイデオロギーとシステムを押し付けてきました。そのとき、モンゴルは共産主義とはどういうものなのかわからなかったが、中国のもとに戻ってしまうより、ロシアのテーマを受け入れたら比較的依存性は防げたと感じるでしょう。しかし、独立を保全する唯一のチャンスではないかと思い、やむを得ず社会主義を選択しました。それが、モンゴルが第二の社会主義国家になった原因です。モンゴルは、社会主義国として1990年まで70年間やってきましたが、大変な時期でした。もちろんよい点もありました。教育、国民の健康問題といった点では発展途上諸国の中でよいレベルまで発展しました。社会、人を中心

とする点では進歩もありました。しかし、経済、何より外交では、モンゴルは何も自分の器量を持っておらず、全てモスクワのクレムリンのほうを見て、あそこの指示でやってきました。しかし、モンゴルの人々は、1921年には共産主義に対し、それはモンゴルの歩くべき道ではないことがよくわかってきました。国民からは反発があったが、そこからは大変な目にあいました。その後、モンゴルの歴代の二人の首相、国会議長、20名くらいの大員などがソ連に連れていかれて処刑されました。それは、スターリンがモンゴルに押し付けてきた政策に反対したからです。スターリンは、もちろん社会主義諸国の中で反対する勇気を持つ人は一人もいませんでした。反対するとクビになるからです。モンゴルの人々もよくわかってきて、共産主義のイデオロギーは、19世紀の初め頃、西ヨーロッパで生まれた労働者階級の思想です。その思想が、遊牧民世界のモンゴルに通用するわけがなく、全然違うので反発が生まれました。1932年に僧侶たちが先頭に立ち、反国民運動が起きたが、激しく弾圧されました。今から考えてみると、10年ごとに社会主義、特にソ連からの依存性に反発する動きがあったが、その都度厳しく弾圧されてきました。ゴルバチョフがソ連の官房に入ってきて、ペレストロイカという新しい政策を宣言したのがモンゴルにチャンスくれたのです。そしてモンゴルの社会の中で、1990年3月に民主主義運動が成功し、共産主義の体制を倒し、モンゴルが民主主義の道を歩み始めました。しかし、当時は、共産主義を拒否すれば、体制を変えれば、とげを抜け出したように我々は簡単に民主主義の良い時期に向かうと信じていたけれども、残念ながら一番の悩みとして特に経済、社会問題が同時に浮かび上がりました。モンゴルの経済はソビエトから依存されていたため、民主化で止まってしまい、国民生活が大変な目にあいました。その頃、日本の政府や国民は食糧援助、救援物資、ウランバートルの発電所、通信の改善という緊急援助をしてくれました。もちろん、他の国も援助してくれましたけれども、思い切った援助はありませんでした。その次に、モンゴルが経済運営する社会主義のやり方を拒否して、市場経済への移行期という段階になってきました。そのために、日本も積極的に手伝ってくれました。その後、20年近く、モンゴルの新しい発展の基盤づくりに日本が手伝ってくれています。そのおかげで、モンゴルは2年前から新しい発展の出発点から動くことができました。こういう日本とモンゴルの関係ですけれども、これが日本に対するモンゴルの人々の気持ちを180度変えてくれたのです。私はあちこちで日本とモンゴルの話をして、モンゴル国民の日本に対する気持ちを短縮して、「3K」、3つのKと言っています。それは、「感謝、関心、期待」です。「感謝」は、モンゴルが異常に苦勞していた時期に、日本が国際社会のモ

ンゴルに対する援助の半分を単独でやってくれたということで大変感謝しています。「関心」は、我々が困ったときに助けてくれている日本とはどういうものなのか知りたい、日本に行って日本語を勉強したい、日本とビジネスや文化の交流関係を持ちたい、そういう関心が高いのです。そして「期待」ですけれども、モンゴルはこれからの新しい国づくりに日本と協力していくことを期待しています。モンゴルは鉱物資源の大変豊かな国です。その鉱物資源の開発、それに必要としているインフラストラクチャの整備、何よりその二つの目標を達成するための人づくり、若者たちの育成に期待しています。そして日本からの直接投資、先端技術の導入にも期待しています。それと同時に、政治の中での安全保障問題を中心に、日本との協力関係を強化していきたい、そういう期待を持っています。両国の関係は1990年から2010年までは、「相互的パートナーシップ」という原則のもとで発展してきました。非常にうまくいって、両国の関係が各分野において拡大されてきました。日本モンゴル友好議員連盟の先生方の貢献、支援も非常に大きいのです。だから、武部先生にモンゴル国の最高の勲章を授けました。引き続いて、林先生のもとで、本当に素晴らしい支援をいただいております、喜んでいる最中であります。両国の関係は、戦略的パートナーシップという新しい段階を目指しております。2010年11月にモンゴルの大統領は日本を公式訪問しました。そのとき、大統領からは、そろそろ日本とモンゴルの関係は次のステップを目指していく時期に来ているのではないかと提案し、戦略的パートナーシップの合意に達しました。昨年3月には、安倍晋三総理大臣がモンゴルを公式訪問し、その半年後にモンゴルの首相が日本を訪問しました。その結果、モンゴルと日本との戦略的パートナーシップのための中期的行動計画が締結されました。その文書によると、日本とモンゴルの関係を戦略的パートナーシップの原則を生かすためには、5つの分野になって発達することを目指しています。まず、政治分野においては、お互いをよく知り合った、信頼できる政治関係に発達されることを目指しています。それは、両国の首脳レベル、他の高いレベルの対話を活発化する、その中で外務大臣同士を年に1回から2回会わせていく、そして最近日本がよくやっている「2プラス2」、それもモンゴルでやっていきます。何より重要なことは、防衛分野、安全保障分野です。それによって、両国の防衛省同士が直接交流することを考えていますが、非常にうまくいっています。2012年の1月に日本の防衛大臣がモンゴルを訪問しました。また、今年の4月にモンゴルの国防大臣が日本を訪問しました。そして今年から初めて日本の参謀本部長がモンゴルを訪問することになっているし、合同軍事演習にも初めて参加することになっています。何より重要なことは、地域的協力

です。北東アジアの安定のために、両国が協力していこうと、そのための話し合いをいろいろなルートでスムーズに進めています。政治関係の中で大事なことは、国会と国会の交流です。非常にうまくいっています。モンゴルの国会議長が1年前に日本を訪問しました。今年の夏に山崎参議院議長が訪問することを検討しています。何よりも国会と国会の交流、そして両国全体の関係の発展には議連関係が非常に大きく貢献しています。先ほど言ったように、長年武部先生が先頭に立って、いろいろやってくれていますけども、林先生に代わって、それがさらにもっと活発に行われています。昨年日本・モンゴル首相が相互訪問することも、その中で政府間対話の発展、何より経済問題・文化交流などに議連が大きく貢献してくれています。昨年8月のモンゴル訪問時には、モンゴルの大統領、首相、国会議長、外務大臣に会ったり、また日本とモンゴルの協力関係に対するセミナーを開催し、日本から50名以上のビジネスマンを連れて成功に終わりました。その後、モンゴルの首相が日本に来たとき、歴史の中で初めて、自由民主党本部で外国の人が講演したのも議連が主導したわけです。こういった政治関係が、これからどんどん緊密になってきます。次の柱は、経済です。今まで、日本とモンゴルの経済交流協力は、モンゴルが単独で「くれくれ」の相手でした。これからは、その関係を互惠かつ相互的に補完した経済協力関係にしたいと考えています。日本がモンゴルから石炭、銅、金、銀など、いろいろな鉱物資源を輸入して、モンゴルも輸出したいと思っています。両国の関心と利益は合致しています。モンゴルは日本から円借款、民間の直接投資、そして先端技術の導入、そういう目標にしていますので、お互いに利益のある、お互いに持っていない部分を補完した、そういう経済協力を目指していきましょうということで、世論のレベルでたくさんのシンポジウムやフォーラムをやってきていますけれども、今年2月には、武部先生のおかげで、札幌で北海道とモンゴルのセミナーを開催し、大成功でした。今年7月22日に東京で、経団連とモンゴルの共催で、モンゴル投資フォーラムをやることが決まって、準備が進んでいます。両国の経済協力はこれからどんどん具体的に進んでいくと思います。前もって皆さんに発表することは、ウランバートルでは新しい国際空港を建設中で、2016年秋頃完成します。そして、これからは、銅精錬工場、製鉄工場、石炭火力発電所、鉄道、道路、通信関係など、いろいろな分野で話し合いや交渉を進めている時期で、あと2年から3年で目標通りの協力関係ができると確信しています。次の柱は文化交流です。文化交流、スポーツ、医療、地方と地方の直接交流、市民団体同士の協力関係、個人と個人の交流、それを両国の政府が幅広く支援して拡大していきたい、そういう約束です。今年は日本とモンゴル文

文化交流 40 周年の年で、それに向かっていろいろなイベントを考えています。今年 8 月に飛行機をチャーターして、新潟を紹介する文化イベントをやることも考えているし、林先生が発表したとおり、両国の書道展を 8 月にウランバートルで、12 月に東京で開催することを目標としています。また、新潟では単独ですけれども、モンゴル書道展の開催を考えています。何より一番大きなイベントは、日本の文化庁主催で毎年開催している日本芸術祭の外国のメインゲストとして、モンゴルからの音楽グループを予定しており、10 月に日本の 5 つの地方に行ってコンサートを行うことを話し合っています。あと、お知らせできることは、モンゴルの 1,000 人の若い人が 5 年間で日本に来て、日本の大学で技術、機械を勉強することになりました。それは、日本政府の教育借款を通じて行います。同時に、モンゴルの若い人たち、建築、道路、橋、電力関係、そういう作業員たちも日本の専門を勉強させて、研修生として預けたい、そういう提案をモンゴルが日本側にしていますけれども、日本側がそれを受け入れてくれているというのは喜ばしいことです。現在モンゴルからは 1,300 人の留学生が来ていますが、今後 5 年間でそれが倍になるということです。次の柱は、国際舞台で両国がお互いを支持し合う協力関係を強化していくことです。国際舞台というと、まず国連が集中して審議しているグローバル問題、例えばモンゴルは一番最初から日本の国連安保理常任理事国入りを支持している国です。それに出馬するために、モンゴルは頑張っています。代わりに、日本がアジア太平洋地域における経済を中心とした連携過程にモンゴルが参加することを応援してもらっています。モンゴルは経済的なメカニズムには入っていませんが、議連の先生方は応援してくれています。二階先生が武部先生と林先生と共に作った「エリア」という研究所があります。それは、将来的にアジア太平洋における OECD になるであろう非常に将来性を持つよい研究所です。それにできれば今年モンゴルを加盟させてもらおうと、応援してもらっているから、モンゴルは非常に力強く期待しているところです。あとは、地域的な安定平和、経済的な地域の連携関係、それにモンゴルと日本はお互いに支持し合っていこうという位置づけの柱に両国の戦略的パートナーシップの目標を設定しています。あとは、皆さんから質問があれば、できる範囲でお答えします。ありがとうございました。

(会場 拍手)

司会：せっかくの機会ですから、ご意見、ご質問がありましたら、ぜひどうぞ。

会場 1：アジア大学学長の池島です。本日はありがとうございました。2 つ質問させていただきます。1 つは、次の発展にかかわる人材の育成です。モンゴルのこれからの若者をど

のように育成していくのか、そのポイントを伺えればと思っています。亜細亜大学は、経済、経営など社会科学系の大学でして、先ほど経済的パートナーシップの話がありましたけれども、亜細亜大学もいろいろなアジアの大学と交流していますので、その辺含めてどのような人材育成を考えているのか、お伺いします。もう一つは、先ほど鉱物資源の話がありましたが、私も JOGMEC で仕事をしておりまして、大使のお言葉の中に、鉱物資源のインフラストラクチャをきちんとしなければならないとありましたが、その辺のところについてどのようなインフラを考えているのか、伺いたいと思います。

大使：まずは人材育成について、先ほどの話をもう少し補足すると、モンゴルには今大学に行って卒業する学生たちの数が、多くてもその卒業生の半分以上は、無職人になってしまうという現象があります。ということは、大学を目指している人々は、ほとんど法律、経済、外国の言葉を目指してやっています。小さなモンゴルには、毎年大学を卒業した人たちの仕事の間が足りないのです。逆に、モンゴルは、これから増やしたい、育成していきたいというのが、経済目標から出てきています。鉱物資源、そのためのインフラ、それに関するいろいろな専門、技術を勉強してもらいたいと思います。日本との協力でモンゴルの技術大学の中に日本式の高専を作ったり、その他にもモンゴルで専門訓練所などを次々に作っているところだが、まだ足りません。したがって、数多くの人たちを日本に派遣したいと考えています。具体的には、火力発電所の技師、作業員たち、そして鉱山、鉱業、その加工工場、関係する専門で勉強してもらいたいです。そして、できれば、日本と共に実現するいろいろな案件やプロジェクト、例えば、銅精錬、製鉄、道路、橋、建築、また、モンゴルは農業の国ですけれども、発酵する技術が遅れていますので、畜肉、乳製品、毛、皮など原料の加工など、いろいろな専門分野を日本で勉強してもらいたいです。勉強してきた人たちを使って、合弁会社、工場などを作りたいと思います。もちろん、日本語、日本文化を理解するのが大事です。日本の優れた文化を勉強する人たちと同時に、モンゴルの発展の現段階の道にあわせて、その人たちをモンゴルに呼び戻したいと考えています。

会場 2：先日、ウランバートルに行って、日本に対しての人材派遣の話を伺ってきましたが、なかなか日本側の受入体制が整っておらず、企業の方々が二の足を踏んでいるということを知りました。日本への人材派遣をどのように受け入れていくべきかを考えなければならないということを感じてきました。日本は、東京にオリンピックを招致することができましたので、これから東京であったり、東北であったり、いろいろなところで人材を必

要とします。ましてや、介護などでは人材が足りないという状況と聞いています。先日、モンゴルでは、日本に人材を派遣したいという話を強く伺いました。それについて、大使のお考え、日本側に期待するお話をお聞かせいただければと思います。

大使：ありがとうございます。日本に対する期待と希望ですが、日本側の受入システムがあまり合わない部分があります。それは、両方の関心を合わせるという方法があり得るか、それから日本の教育、文部省、議連の先生方とも相談して、協議していきたいと思っています。それに、皆さんからも、いろいろな具体的な提案を持ってきて、協議していきたいと思っています。

大使：最後に、ぜひ皆さんの耳に届けたいと思っていた点がありまして、言い忘れましたので言わせていただきます。先ほど、私は日本に対するモンゴルの人たちの目と心が 180 度変わったという話をしました。その意義、意味は非常に大きいです。そういうことは、今北東アジアの国際事情を見ると、さまざまな問題が起こっています。その中で、過去の歴史、教科書問題、歴史問題、いまだにいろいろワイワイしている国や団体も多いわけです。それでは、地域の安定と平和にみな一緒になるということは難しいです。その意味では、モンゴルと日本は、その両国の関係の発展というのが地域の他の国に模範となるべく良い関係に生まれ変わったということを言いたかったのです。モンゴルの国民は、わずか 20 何年か前まで、日本の国を、中国より、韓国より、ロシアよりも厳しい目で、怖い国、軍備拡張を考えている国、アメリカ帝国主義と組んで武装している国と見ていたのです。70 年前にモンゴルの独立をなくそうとしたときも、怖い、悪い、という気持ちが圧倒的だったのです。今は 180 度変わったのです。毎年モンゴル国内で世論調査が行われています。その中で、一番好きな外国のトップは日本です。そして、これから一番期待できる国のトップも日本です。なぜこう変わったかという、先のモンゴルに対する日本国民と日本国の応援の賜物です。したがって、本当に過去にいろいろあっても、その問題を解決しようと決心して共に頑張れば、できないことはないということを示したのが、両国間の関係ではないでしょうか。それは、現代のモンゴルと日本にとって本当に重要なことでもありますし、これから戦略的パートナーシップにより親しくなることを期待して、私からの話を終わらせていただきます。

(会場 拍手)

司会：ここで当財団評議員会議長村田吉隆より、ご挨拶をさせていただきます。

村田：連休が終わりましてすぐの例会でございましたが、多くの皆様にご出席いただきま

して、本当にありがとうございました。フレルバータル大使におかれましては、わが国とモンゴルとの関係だけではなくて、モンゴルの皆さん方の日本に対する感情が180度変わったという我々を大変勇気づけるお話までいただきまして、素晴らしいお話だったと思います。本当にありがとうございました。今から4年前に、大統領閣下が日本に来られまして、民主党政権下でありましたけれども、大統領が日本の国会で一度もわが国の民主化のために大変お世話になったということで、日本国民に感謝の演説をさせてもらいたいということで、民主党の議院運営委員長にお願いして、演説をさせていただいたことがあります。大変長い演説でしたけれども、内容は大変素晴らしいものでした。最後に結びの言葉として、「日本よ、目を覚ませ」という言葉が印象に残っております。あれから、今大使の話聞いておると、今は次の日モンゴル関係に向けて、着々といろいろな計画が進んでいるようでして、この2つの国が友好関係だけではなくて、本当に友達の関係になることを期待しております。その意味で、この東亜総研が、モンゴルと日本との関係の更なる発展のために何か活動できることがあれば、大変嬉しく存ずる次第でございます。本日は大使、皆様方、本当にありがとうございました。

(了)